

22

森脇飛騨覚書・桂炭円覚書・長屋太郎左衛門覚書・老翁物語・深瀬次郎兵衛覚書（毛利家文庫）

記録・記憶 ⑦

## 戦の記憶を集める

### ～萩藩前期の戦国軍記編さん～（3）

#### 《共通点と相違点》

表装が統一されている5点の「戦国軍記」。これらは、あるいは御宝蔵に納められていたとも考えられるものです。それらの共通点と相違点、作成された時代背景などについて考えてみます。

#### ①作成時期：

5点は、萩藩初代藩主秀就の時代に作成されたもの、藩政前期の早い時点での作という点で共通します。

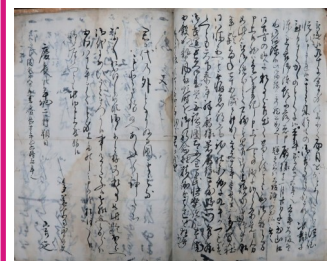
ただし、A「森脇飛騨覚書」、B「桂炭円覚書」、C「長屋太郎左衛門覚書」、D「老翁物語」の4点は元和～寛永前期頃、父輝元（宗瑞）の存命期（輝元は寛永2年死去）あるいはそれに近い時期の作であるのに対し、E「深瀬次郎兵衛覚書」はそれより20年以上遅い、秀就の晩年期（慶安4年〈1651〉秀就死去）の作という違いがあります。秀就時代、「戦国軍記」の作成時期には2つの画期があるようです。

#### ②作者：

作者は、B「桂炭円覚書」、C「長屋太郎左衛門覚書」、D「老翁物語」が萩藩士、A・Eが吉川家、宍戸家家臣（萩藩からみて陪臣）という違いがあります。A・Eは、それぞれの主家とその家臣の動向が詳しい点が特徴です。

#### ③特徴：

A「森脇飛騨覚書」とB「桂炭円覚書」は、一老臣（藩政期以前の戦場経験者）が、過去を振り返り記したものの、回顧録としての性格があります。両人とも、「すでに年を取り、覚え違いや間違いもあるだろう」という意味のことを述べています。C「長屋太郎左衛門覚書」の場合、元就・輝元近習も務めた家臣が、「軍談之書」の作成を命じられたものである点が特徴です。D「老翁物語」は、輝元の意向を受けて作成されたもの、A・Bを元にした二次創作物、教訓書としての性格をもつといった特徴があります。E「深瀬次郎兵衛覚書」



大内殿滅亡之次第  
（言延覚書）  
多賀社文庫152・153

本書は、慶長20年（元和元年・1615）、山口の多賀社大宮司高橋言延（ことぶ）が輝元の命を受け、大内氏の滅亡にいたる歴史を書き記し提出したものです。言延は75才、「覚之分如此候」とあり、過去の歴史をよく知る古老の覚書という性格のものです。このころの輝元が、過去の歴史を知る記録を求めていた一例を示すものでもあります。『山口県史 史料編』中世1収録。

